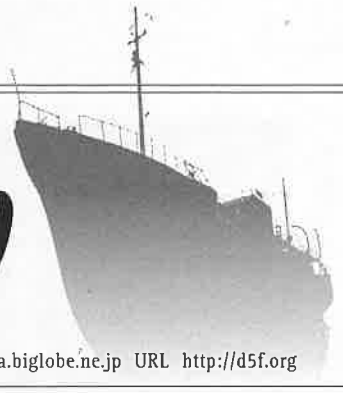


2008.10.01  
No.347

(9・10月合併号)

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内  
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

# 福竜丸だより



原爆ドーム保存工事



写真左・保存工事が始まった原爆ドーム一九六七年四月、佐藤重夫広大教授撮影  
右・夢の島に放置された第五福竜丸、一九六七年夏、工藤敏樹撮影

## 企画展「原爆ドームと第五福竜丸 市民が守った平和遺産」開催

9月23日～12月21日

第五福竜丸展示館では、九月二三日より企画展「原爆ドームと第五福竜丸市民が守った平和遺産」を開催いたします（主催・財団法人第五福竜丸平和協会）。

本展は、今年が第五福竜丸船体の保存がよびかけられて四〇年のメモリアルイヤーに当たることから企画されました。

第五福竜丸が廃船になり夢の島に放置された一九六七年とは、倒壊の危機にさらされていた原爆ドームが全国的な募金により最初の保存工事が実現した年でした。一九六八年には第五福竜丸の保存がよびかけられ、市民の保存のうごきへと発展していきます。企画展をつうじて、原爆ドームと第五福竜丸が被爆国の国民、市民が残したものであ

り、「平和」「原水爆に反対」の願いを伝えます。

展示は、原爆ドームと第五福竜丸それぞれの保存、修復までの経過と資料を当時の新聞や保存のとりくみの諸資料、写真をとおして知っていただくとともに、今日の原爆ドームと第五福竜丸の存在を改めて思いをめぐらせていただきたいとの企画です。

### ◆主な展示

△原爆ドーム▽構成・原爆被爆、戦後の復興と原爆ドーム、ドームの存廃論議、ドーム倒壊の危機、保存へ、全国からの募金と工事の実施。ドームのレンガ片、ドームの鉄砕片、写真資料、保存関係資料、新聞資料、映像資料（NHK提供）、高校生が製作した原爆ドーム模型。

（2めんにつづく）

今号は企画展特集号です

△第五福竜丸V構成・沈めてよいか第五福竜丸、保存のよびかけ、保存のとりくみ、展示館建設・展示へ。新聞資料、写真資料、保存関係資料、映像資料（NHK提供）、中学生が製作した第五福竜丸の模型、ほか。

◆協力 広島市公文書館、広島市議会、平和記念資料館、中国新聞社、NHK、原爆の凶丸木美術館、関根一昭、大澤仁志、第五福竜丸ボランティアの会  
◆イラストレーション・黒田征太郎、デザイン・K2長友啓典、上浦智宏、中村健

会期中にイベント開催

今回の企画を記念して、展示館で2回のイベントを催します。ぜひご参加ください。

◇10月11日（土）14:00～16:00 NHK制作のドキュメンタリー「原爆ドームの20年」（1965年8月放送）と「廃船」（1969年3月放送）を観る会。「原爆ドームの20年」は存廃が論議となる中、被爆者、広島市民などへのインタビューを中心にドームの今後を問いかけたドキュメンタリー。今回の放送のために、新たにナレーションを吹込み



黒田征太郎さんによるイラスト・チラシ

再現された映像を初公開。「廃船」は夢の島に捨てられた第五福竜丸の保存を追う貴重な記録映像（工藤敏樹ディレクター）。  
\*11月1日（土）にはワークショップが開かれます。詳しくは8めんを参照。

遺されたモノの意味を感じながら・・・原爆ドームの模型製作

大澤仁志

今回、原爆ドームの模型を作りました。模型製作では、様々な工程がありました。中でも難しかったのはドーム中央部です。円筒状の場所が今回の材料の発泡スチロールでは、形状的に難しく、関根先生とともに考え、工夫した結果、見事に成功しました。この工程の前に、発泡スチ

製作にはげむ大澤仁志君



ロールから、ドームの壁や、窓枠を切り取る作業がありました。その作業では、最初は、切り取り、あとから付けようとしたのですが、どうしてもあとから付けると幅が合わず、合っても接着剤がはがれてしまうので、方法を変えてサッシの部分は切り取らず、付いたまま間を切り取る方法を使用しました。ドーム壁部分は、ホワイトセメントを使用し、接着しやすいようにしました。着色には、カラスプレーを使用しましたが、見た目と違う色がありました。考えていた色よりもあっていたので、その

点は、とてもよかったと思います。

ドーム展望台部分の鉄骨は、銅線を使用し、ハンダで接着しました。この作業が意外と神経を消耗する作業で、一つの箇所を作るのにも相当な時間がかかったと思います。最初のころは一つをつけるのに一〇分以上かかることもざらではなく、半周するのに一時間以上費やしていました。最後の鉄骨同士の間にある銅線の接着は、一本につき三〜四ヶ所のはんだ付けが必要で、大変でした。

最初のころは、完成できるの不安でしたが、作っているうちに楽しくなり、今では、まっすぐにいったように感じます。

ドーム作りを通して原爆ドームの大切さが少しずつわかってきたような気がします。いつか本物の原爆ドームを見たいと思います。（おおよそひとし／埼玉県立皆野高校一年）



# ヒロシマに存在しつづける原爆ドーム

江草則貴

したい。

◆◆

世界遺産の原爆ドーム、原爆慰霊碑、原爆資料館。平和記念公園（広島市中区）の中核をなす三点を結ぶラインは、設計者である故丹下健三氏が考えついた被爆地の復興思想の原点である。丹下氏はそれを「軸線」と呼んだ。（中略）

市公文書館に一枚の設計図が残る。丹下氏はドームから軸線をさらに延ばした北側の旧軍用地に公共施設を連ね、被爆の記憶と街の復興が、お互いに結び合う都市構想を打ち出した。市の資金難で、この案は実現はしなかったものの、被爆一〇年後の一九五五年に完成した平和記念公園に、軸線の思想は息づく。

◆◆

特集記事は、資料館、慰霊碑、ドームを結ぶまっすぐな軸線の延長線上に建てられた構造物が、この軸線を意識していることを紹介した。

例えば、軸線を北へと延ばせば市民球場の左翼席をかすめ、県立総合体育館の真上を通る。その体育館の屋根はV字形に開き、てっぺんにある筒形の二本の排気設備が、軸線の通り道を守るような造形となっている。

第五福竜丸もモチーフにして核被害を鋭く告発した岡本太郎氏の巨大壁画「明日の神話」の広島誘致が成功すれば、その設置場所は、やはり軸線上（市民球場と体育館の間）に位置するハノーバー庭園となるはずだった。

と思う。

その武骨な姿は孤高にも映り、日陰に沈めば核兵器廃絶がほど遠い世界の閉塞感を漂わせ、そして日差しを浴びれば廃虚から再生する力強さを感じさせる。ドームはさまざまに表情を見せてくれる。

●世界平和記念碑

ところで、世界遺産リストで原爆ドームは「広島平和記念碑」の名称で登録されている。世界平和を希求するメモリアルという観点からの命名だろう。米国が難色を示すなど登録が実現するまでの経過を振り返れば、原爆という文字を隠すことに意味はあったと推察もできる。

半面、犠牲者への鎮魂と原爆を告発する思いを薄め、人類の「負の遺産」としての位置付けも不明確にしてしまうと、このネーミングに疑問も感じる向きも少なくない。

ただ、人はすぐ景色になじむけれど、言葉はそうでもないようだ。だれもが「原爆ドーム」と呼び続けている。（えくさのりたか／中国新聞社報道部長）

人は景色にすぐなじむ。初めて目にしたときの新鮮な驚きをやがて忘れてしまう。高層ビルや巨大な橋など人工構造物を見るたびに、そう思っているのだが、原爆ドームは、やはり違う。一発の原子爆弾で廃虚と化した広島島の「破壊」「鎮魂」の象徴。見るたびに、その存在感に圧倒される。

●再生のシンボル

しかし、かろうじて屋根の骨組みを残した瞬間から、ドームは「再生」のシンボルという使命も背負った。入社二年目の若い記者がこの夏、取材に走り回り、中国新聞朝刊（八月四日付）で特集した「復興の軸線」からさわりを紹介



慰霊碑からドームをのぞむ

●基町アパートもさらに北へ向かえば、ちょうど三〇年前に全工事が完了した基町高層アパート群が並び立つ。メーンの二つの建物の間は軸線を引き入れるように空けてあ

る。そこに低層のショッピングセンターがあり、屋上庭園には、平和記念公園とのつながりを意識した緑豊かな通路が整備されている。反対に南へ向かえば、ごみ処理の最新プラント（市環境局中工場）。これも軸線を強く意識した。丹下氏の事務所吉生氏が設計した。海に面して突き出したベランダを軸線の終着駅と位置付けている。こうした構造物の数々がドームの存在感をいつそう際立たせてくれる。

被爆直後には「悲惨な記憶は思い出したくない」として撤去論も根強かったドーム。被爆から一五年後、白血病のため一六歳で亡くなった楮山（かじやま）ヒロ子さんのこのした日記の一文「あの痛々しい産業奨励館（原爆ドーム）だけが、いつまでも、恐るべき原爆を世に伝えてくれる」が、全国に広がった保存運動のきっかけになったのは有名だが、多くの人にとってドームの存在感はもともと圧倒的だったからこそ、永久保存、世界遺産化につながったのだ

## ますます高まる価値 第五福竜丸、被ばくの 証人として

岩 垂 弘



第五福竜丸のもとで学習する生徒たち

今夏も広島を訪れた。「広島原爆の日」の八月六日を中心に開かれた記念行事や原水

爆禁止を目指す大会・集会を取材するため、私にとつては四〇回目の「8・6」であった。四〇年にわたつて毎年、広島で「8・6」を見続けてきたわけだが、今年とくに印象に残つたことの一つは、各会場で、例年にも増して「被爆体験の継承」の重要性が強調されたことだった。敗戦からすでに六三年。被爆体験や戦争体験をもつ国民がいよいよ少なくなつてきたからだと思われた。

原爆がもたらした被害がいかに残酷で非人道的なものであるかを具体的に正確に伝えることができるのは、原

爆の被害をじかに受けた人たち、つまり被爆者である。が、高齢化が進み、被爆者は年ごとに減少しつつある。一九八〇年に三七万人を超えていた被爆者は今年三月には二四万三六九二人になった。平均年齢はいまや七五・一歳である。

それだけに、原水爆禁止運動関係者の間では「被爆者がさらに減り、残つた被爆者も高齢化がさらに進めば、被爆体験を証言する人がいなくなるのでは」との懸念が年ごとに強まって来ている。



一方、いまや日本人の七割以上が戦後生まれで、戦争体験者も減少の一途をたどつていく。原爆や戦争の記憶は薄れる一方なのだ。原爆や戦争の記憶が失われれば、核武装論や戦争肯定論が高まりかねない。このため、被爆体験を戦争を知らない世代にどう伝えてゆくかが運動関係者の間で緊急の課題になつてきたわけである。

いずれにしても、原爆体験を証言できる人たちがこれから少なくなつてゆくのはは

や避けがたい。となると、これからは、人々は、原爆の惨禍を伝える文字、例えば原爆体験記や被爆をテーマとした文学作品、あるいは映画、テレビ、ビデオ、DVDなどの映像などによつて被爆の実相を知つてゆく以外にない。とりわけ重要な役割を果たすのは、被爆建造物とか、被爆者の遺品などといった「物」なのではないか。なぜなら、これらは、だれの目にも直接触れることができ、極めてインパクトが強いからだ。

例えば、広島島の「原爆ドーム」。ヒロシマを象徴するものとしてこれ以上のものはない。その前にたたずめば、だけれども原爆の惨禍に想像をめぐらすことができる。



日本人にとつて広島、長崎に続く「第三の核の被害」となつたビキニ被災事件についても同様のことが言える。この事件を象徴するものは何と云つても「第五福竜丸」だろう。私たちは、都立展示館に保存されている第五福竜丸と対面することで事件の実相をより具体的に詳細に知ること

ができる。私は、この被災船を見上げるたびにこんな思いにかられる。「もし福竜丸がこうした形で残されていなければ、ビキニ被災事件はいまほどに世の中に知られることはなかったのではないか」。そして、船の保存に奔走した人たちの熱意に敬服する。

それだけに、私たちは、原爆ドームや第五福竜丸といった「被爆・被ばくの証人」を、かけがえない平和遺産として、これからも大切に保存してゆかなくてはと切に思う。ただ、福竜丸に関しては、痛みが激しいとされる展示館の補修や、以前から懸案となつていく付属資料館の建設には少なからぬ金がかかるなど、乗り越えなければならぬ問題がある。が、私たちはすでに広範な市民の手で募金運動を起こし、それで原爆ドームや福竜丸を保存してきた実績をもつ。ぜひ、こうした経緯に学びたい。(いわだれひろし/元朝日新聞編集委員、第五福竜丸平和協会評議員)

# 原爆ドームの修復と保存

中山俊介

世界の恒久平和希求のシンボルとして平和記念公園の一部に保存されている原爆ドームも戦後六三年を過ぎ、建物の風化が進み何次かの修復作業を経て現在にいたっている。ここで、今までにどのような理由でどのような修復が行われたかを紹介し、今後の保存に関する課題についても述べてみたい。

\*

戦後の危険建造物の撤去作業をまぬかれ一九五五（昭和30）年に原爆ドームを基軸とした平和記念公園が完成した。五〇年代後半に建物の風化が顕著になったため、六六（昭41）年に原爆ドームの保存が広島市議会により決議された。それに基づき、保存調査が実施され、六七年に第一次の保存工事がおこなわれている。この時には、その時点の形状を可能な限り忠実に保存し可能な限り永く維持しう

るようにする。また、構造的に補強が必要な箇所については可能な限り目立たないような補強措置をとることを方針として壁体亀裂部分の接着、危険箇所の補強鉄骨工事、当初鉄骨及び新設補強鉄骨の防錆塗装工事、倉庫屋上防水及び壁体天端モルタル塗りが実施された。この時に、崩壊の危険があつた壁の倒れを是正したり、地上に落下していた中央ドーム開口部の鉄筋コン



世界遺産となった原爆ドーム

クリート製の大梁を復旧する工事が行われている。また、壁体の亀裂に関しては、エポキシ樹脂を注入し接着している。さらに、建物の各階の床組が破壊焼失しており残った壁体にも開口部が多く、亀裂が入っている状態であり、地震や台風などの水平外力に弱いと判断されたため、水平剛性を高めるための補強がなされた。

\*

その後、二〇年が経過した一九八七（昭62）年に広島市が再度、保存状況を調査した。この調査により、地盤沈下、振動強度に問題はないものの第一次保存工事における補修材に劣化が進んでいることが判明しその抑制が必要と判断された。この調査結果を踏まえて一九八九年から翌年にかけて第二次の保存工事が実施された。その内容は、新たな壁体の亀裂の補修、壁体天端の過去に補修した樹脂モルタルの補修、鉄部材の材料更新と防錆再塗装などが行なわれた。

さらに一二年経過した二〇〇二（平14）年から〇三

保存工事の施行



年にかけて、第三次の保存工事が実施された。主にレンガ壁や、倉庫屋根への水分供給を防ぐための措置と地下室への雨水の侵入防止などが実施された。

このように今まで三次にわたる保存工事を経て保存されてきている原爆ドームは、レンガ壁にモルタルを塗布した壁体となっており、もともと、水分供給が原因となる塩類風化などに弱い構造である。また、前述のように、壁などいわゆる耐力壁となる部材が少なく、耐震性に不安を覚える構造である。破壊された状態をそのまま残して行こうとしているために、大きく外

観、形状を変えてしまうことは許されない原爆ドームは、文化財保護という課題に関して非常に大きな制約を受けている。今後は、この制約と保存手法あるいは技術との兼ね合いが問題となっていく。二〇〇一年の芸予地震にも耐えた建物であるが、劣化も進み、芸予地震の再来が心配される中、保存へ向けたさらなる取り組みが必要となる。

（なかやましゅんすけ、独立行政法人東京文化財研究所近代文化遺産研究室）

## （財）第五福竜丸平和協会 設立 35 周年記念祝賀会

11月29日 14時—16時

会場 学士会館 会費 5千円

\*会員には来月ご案内を送ります

# 第五福竜丸、船体保存のための課題

日塔和彦

## 木造文化財の保存

木造文化財の保存には、多くの専門家の知恵が必要である。第五福竜丸の場合は造船学、保存科学研究者、船大工などの技能者、全体のコーディネーターを行う保存技術者などが専門家に当たると。また保存修理工事を実施する場合は、工事請負会社の現場代理人や主任技術者、設計監理者が関わりそれぞれ専門的立場から文化財の永久保存について協議・検討を重ねる。私は保存技術者として一九八五～六年の船体修理に設計監理を担当した。

検討の結果、文化財保存としてのあるべき理想の姿がある程度明確になっても、現実にはそのようには実行されない場合が多い。むしろ実現できるのは稀有といってもいい過ぎではない。その最大の障害は予算上のことになるが、

それ以外にも技術的問題、施工上の問題、工期の問題、近年では環境上の問題など多岐にわたる場合が多い。

文化財には修理を繰り返しながら保存するという宿命的なものがある。木造建造物の例では、二〇～五〇年毎の屋根葺替えなどの維持修理、一五〇～二〇〇年毎の解体修理などの根本修理を繰り返し実施し千年以上の寿命を維持している。

## 第五福竜丸の場合

第五福竜丸は、一九八六年に種々の問題点を含みながら

も根本修理を終えた。一九四六年の建造後四〇年目のことであった。このように早い時期の根本修理が必要になったのは、木造船ということ以外にこの船の辿った稀有な経緯が関係している。しかし、これによりこの船特有の価値を形成したのであり、保存上最も重視すべき歴史でもある。

しかしながら、この早期破損にはその後の人為的被害も大きく影響している。それは展示館の環境が木造船の保存に適していないために、収納後急速に破損が進行した事実がある。その結果、船体を構成する木材は「豆腐のような状態」にまで腐朽していた。

修理では肋骨や竜骨など主要部材は、このような古い腐朽部材を存置したまま新しい木材を補加して構造補強を施している。本来なら残



木材の腐朽部材

した腐朽古材は含浸強化処理を施す必要があるが、経費的に、また工期的にも不可能であった。このため、現在も内部では古材表面から腐朽破片の剥離が少しずつ進行しており、



機関室上部の鉄部状況

最終的には部材の消滅までいくことになる。その他にも夢の島放置時は海水に浮き沈みを繰り返したので、古材中には塩分を多く含んでおり、鉄など金属部品の錆を進行させる原因にもなっている。

船橋や操舵設備などの鉄部は錆がひどく、部分的には錆びて朽ちた部分もみられるが、修理ではいっさい手をつけていない。従って現在も船橋内部の鉄錆はそのまま、塗装のペイントも剥げ落ちたままの状態を保っている。錆は大気中の湿度によって進行するので、防錆処理を施さないと最終的には鉄部もなくなってしまうことになる。

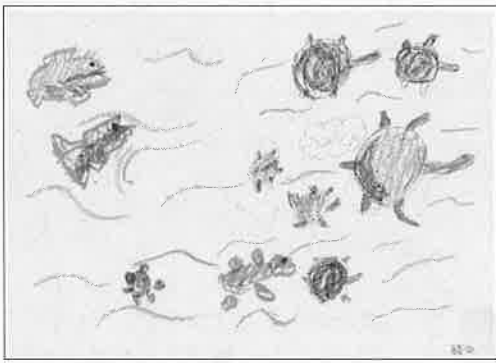
## 科学的処理の試験施工

一九九七年、東京文化財研

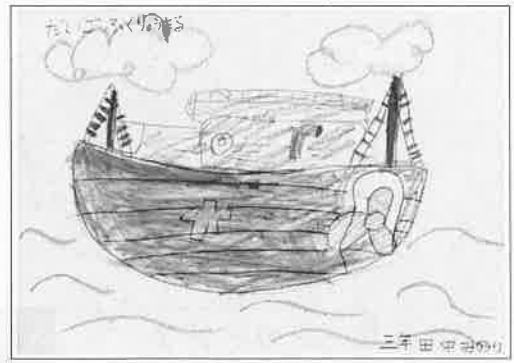
究所の指導で腐朽古材の含浸強化処置と防錆処理を試験的に実施した。科学的処理は一度施工すると再施工は困難になるので、慎重な薬剤選定と施工、経過観察が必須となる。含浸強化処理剤は漆系樹脂、防錆処理としてはタン

ニン酸を利用して錆を定着させる方法が選定された。今のところ経過は順調である。船体に科学的処理を本格的に実施するには、大きな問題を伴うことになる。それは、大部分の腐朽古材や鉄部は見ることでできない船体内側にあるため、前回補足した新材を一旦取り外さないと施工できないからである。部分的に少しずつ取り外していけば、船全体のバランスを崩さずに行うことが可能と思われるが、例えば外板古材は肋骨新材に錆釘で取り付けてあり、これを取り外せば腐朽した外板古材は粉々に崩れてしまう恐れが多い。補修の再施工はかなり困難であるといわざるを得ない状態にある。

(7めん下へつづく)



## 2008年夏 子ども ワークショップ ショップ



七〇日間に及ぶ特別展『ウミガメと少年 第五福竜丸と海へ』が閉幕しました。六月二三日の沖縄慰霊の日からスタートし、七月一六日（世界初の核実験）八月六日、九日、一日をはさんだ日程で、会期中には七回の子どもワークショップが開催されました。

「子どももおとなも一緒に第五福竜丸と航海しよう」との呼びかけが複数のメディアで取り上げられ、夏休みの小学生らが多数参加しました。

最初に展示館からのお話と見学、ボランティアの会による絵本の読み聞かせのプログラムで、各回とも担当スタッフの工夫が凝らされています。野坂昭如さんの「戦争童話集」より、「青いオウムと痩せた男の子の話」「干から



びた象と象使いの話」「年老いた雌狼と女の子の話」「焼け跡の、お菓子の木」から一遍が紹介され、その後感想を絵や言葉で書いてもらう、歌をうたう、参加者で語り合うなどの企画がありました。

期間中にスタッフは男鹿和雄さんから紹介された亀の折り紙（吉澤章考案）をマスターし、参加の記念にプレゼント。また八月六日にはフルートの荒川洋さん、ギターの松尾俊介さんによるミニコンサートが開かれました。演奏とともに栗友会の新美智恵さんが、マリー・ホール・エッツの絵本「もりのなか」の朗読し、子どももおとなも楽しく聴き入りました。この作品は主人公の「ぼく」が森の中へでかけていくとライオンやゾ



ウヤクマたちがどんどんついてくるといってお話です。野坂さんの戦争童話とともに、人間以外の「命」について、生きていることについて考える優しいひとときになりました。

この特別展では、展示の準備やオープニング記念会、イベント以外の日にも、来館者と絵を見守り、絵本『ウミガメと少年』をはじめ関連書籍、グッズの販売でもボランティアスタッフが活躍。夏休みを利用して恵泉女学園大学の三回生の小林美菜子さん、フリー映像クリエイターの加藤淳一さん、映像アーティストカワチキララさんはじめ、たくさんの方にお手伝いいただきました。（カットは子ども達が描いた感想の絵）

（6めんからつづく）

### 船体保存上の課題

木造文化財は適切な保存措置を取り続けられ、理論的には永久保存が可能である。しかし、第五福竜丸の場合は当初部材がどの程度残るかというオーセンティシティ(authenticity 真実性)に問題が残ることになる。

第五福竜丸の船体保存上の課題を二つあげると1腐朽古材と錆びた鉄材の保存処置、2展示館の改修・改築となるだろう。1については、前述したようにかなりの困難性を伴うものとなる。2についてはあまり言及しなかったが、取り敢えずは雨漏り防止と断熱工事を実施し、将来的には保存に適した施設に建て替えることと思う。

木造構築物は、何年経っても常に呼吸しながら生き続けている。この呼吸を止めることなく、大切にして付き合うこと、これが千年を生きる長寿の秘訣といえるであろう。（にっとうかずひこ／木造文化財修復、東京芸大客員教授、協会評議員）

## メッセージカードが ノルウェーへ

ノルウェーのボルダ大学で開催された原爆展 THE LITTLE BOY OF HIROSHIMA に、展示館来館者が描いたメッセージカードが「出張」しました。同大学講師の倉 典暁さんからの依頼で実現したもので、終了後には会場で集められたノルウェーの子どもたちからのメッセージも届く予定です。

メッセージカードは、展示館で開催した黒田征太郎さんの作品展「PIKADON 展」(2005年7月16日—8月14日)で製作した「Yes, No カード」に、来館者が自由にメッセージを書いて館内に貼られたもの。この2年半で200枚以上が掲示され、夢の島公園向かいの陸上競技場で競技会の合間に来館する陸上部員や修学旅行生などが、思いおぼいのメッセージを書いています。

ノルウェーは軍縮や紛争調停に熱心で、ノーベル平和賞でも知られている国。首都オスロには北極探検船フラム号が、福竜丸同様に屋内保存展示されている博物館があります。

## 英文ブックレット出版

協会の川崎昭一郎会長執筆による英文ブックレット「Daigo FUKURYU MARU ~ Present-day Meaning of the Bikini Incident」ができました。『第五福竜丸—ビキニ事件を現代に問う』(岩波ブックレット2004年)をベースに、最新のトピックスを加筆したものです。一部500円。展示館書籍販売コーナーでも普及しています。ぜひご利用ください。

## 反核平和マラソン出発

8月2日、平和への願いをこめて走る「反核平和マラソン」が第五福竜丸展示館前から出発しました。フランス



スポーツ連盟からも4名が参加。安田事務局長の案内で展示館を見学後、夏の太陽の下、都心へとスタートしました。

## 夏休みに来館者多数

7月、8月は夏休みの自由研究に福竜丸を調べようという子どもたちで賑わいました。埼玉の高校では昨年引き続きレポート課題が出されており、用意した参考資料が大人気でした。特別展を目指して遠方から来館する人も多く、来館者ノートやアンケートにもたくさんのメッセージが寄せられました。

神戸から来た大学生は、「地球人の一人として考え続け行動し続けたい。今日ここで知った福竜丸のこと核のことを、周りに話すことから始めたい」と記しています。

## 今年もエンジンに薬塗り

毎夏の恒例になった、「平和のための埼玉の戦争展」スタッフによる、エンジンの錆止め薬の塗布作業が、8月13日に行われました。

同戦争展では、福竜丸のコーナーも設けて、青年たちが来場者に解説をしています。この日は20人が参加。今回初めて来館したメンバーもあり、作業の合間に見学と学習も行いました。



ワークショップ「福竜丸で学び伝える - 報告と交流」のお知らせ

◇2008年11月1日(土) 午後1時半～4時半

◇第五福竜丸展示館内 参加無料

企画展「原爆ドームと第五福竜丸」に関連してワークショップを開きます。40年前の原水爆反対、平和を希求する市民の願いは、いま、遺された第五福竜丸、展示館を通じてどのように伝え広げられているか。証言活動をする元乗組員大石又七さんとかかわりから生み出された平和学習、実践などを、すすめる教員などから報告、福竜丸を活用した学習活動をより広げていくための方向を考え合います。どうぞご参加ください。

◇プログラム

第1部 展示館からの報告・記録映像上映

第2部 報告と交流

・コーディネーター 藤田秀雄(協会副会長)・報告 榛葉文枝(元・和光中学校教諭)「大石さんと模型船～語り始めた大石さんとの交流」、川口重雄(田園調布学園教諭)「実物を訪ねる～保護者もともに学ぶ」、斎藤あずさ(神奈川学園教諭)「大石さんを学校に招いた中学時代、教師時代」ほか